

人間

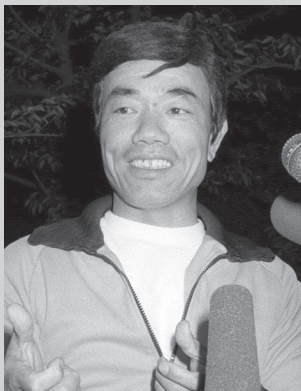
晩年

図巻

2000年代編

関川夏央

〈第1回―1〉



写真提供：共同通信社

大貫久男

—筋骨隆々の心筋梗塞—

- おおぬき・ひさお
- 路上で一億円拾ったトラックドライバー
- 2000年12月2日没(62歳)
- 心筋梗塞

トラックドライバーの大貫久男が銀座・昭和通りの路上で一億円を拾ったのは一九八〇(昭和五十五)年四月二十五日の午後六時過ぎだった。

路側のガードレールの支柱上に風呂敷包みが載せてあるのが見えたので、仕事帰りの大貫久男は車を停めて拾い、カラの荷台に放り込んだ。

風呂敷包みとは妙ではあったが、本人は古新聞の束と思っていたという。このとき四十二歳で錦糸町住まい、日頃から娘が参加する子ども会に協力していた彼は、一キロ十八円と高値を呼んでいた古新聞を売って寄付の足しにしようと、ほとんど反射的な行動であった。

帰宅して銭湯から出てくると、妻が青い顔で立ちすくんでいた。風呂

敷包みを解いたらお金が入っていたという。ビニールで包装された一千万円の束が十個、合計一億円であった。大貫久男はすぐに拾得物として警察に届けた。

政治資金、投資家グループのあやしげな金、一億円の出所は憶測を呼んだ。

拾得場所すぐ前のビルに事務所を持っていた仕手株グループが車で運ぼうとした五億円のうち、急ぎ過ぎて積み込み忘れた一億円ではないかといわれたが、「落とし主」はついに名のり出なかった。その頃、落とし主が判明しない場合、拾得物は六カ月後に拾得者の所有に帰すことになっていた。それまでの遺失物の最高は七六年の千百万円だが落とし主が判明していた。一億円は破格であった。

八〇年十一月九日、一億円の所有権が正式に大貫久男に移った。十一月十一日、彼は早朝ジョギングの姿で警察署に出向き、一億円の小切手を受け取った。大貫久男自身の月収は二十五万円、年末宝くじの一等賞金三千万円の時代であった。

一億円を拾って以来、大貫久男の家には見知らぬ人々からの電話と手紙が相次いだ。多くは寸借の希望で、脅迫状が混じっていた。そのためナーバスになっていた彼は当初、身辺警護のためにガードマンを雇い、また防弾ベストを用意した。やがて脅迫も途絶え、大貫久男の生活は旧に復した。

堅実人生を見舞った二つの「意外」

一九三八年、栃木県の農家に生まれた大貫久男は中学を卒業すると上京、繊維問屋に住み込んだ。五四年当時の小遣い銭は月に六百元、一日あたりなら二十円で一杯二十五円のラーメンに足りなかった。その後運送業に転じて結婚、三人の子どもに恵まれて堅実に仕事をこなしていたのだが、この記録的拾得物のせいで周囲あわただしく、会社を辞めざるを得なくなった。しかし騒ぎが沈静化したあとは、近くの別の運送会社に勤めてドライバーの仕事をつづけた。

マスコミが再び大貫久男に接近したのは八九年四月、川崎市高津区の竹やぶに捨てられていた計二億円以上が発見されたときである。彼の肩

書は「拾得物評論家」であった。その後も思い出したように、週刊誌は「あの人は今？」と大貫に近づいた。

一時所得とみなされた一億円のうち、税金三千四百万円を一度に納めた。拾得翌々年に買った墨田区の3LDKのマンションが三千六百九十万円、これも現金で払った。残る三千万円から家族五人分の保険を一括前払いした。

そんな一億円の使い道と、「いまでもあの一億円は、コツコツとマジメに働いていた、わたしへの、天からの恵み」だと思っています」という本人のコメントは、それぞれ九一年、九五年、九八年、二〇〇〇年に取材された別々の週刊誌で、ほとんど一字一句違えず繰り返されている。

偶然得た大金は、必ずや人生の失敗につながるはずだというマスコミの「期待」は裏切られた。取材が間遠になったのはそのせいだろう。

八一年に生まれた初孫の女の子は後年、吉本興業所属のお笑い芸人「タカダ・コーポレーション大貫さん」の芸名で活動した。小学校時代の彼女が、おじいさんは一億円拾った人だと旧友に自慢してもまったくウケなかったのに、芸人になったのちは、客の年齢が高い浅草などではびっくりするほどウケた。そのときはじめて彼女は、おじいさんはエラかったんだなあ、と思った。

還暦を過ぎてからの週刊誌取材で大貫久男は、こんなふう語っている。

すでに三人の子どもは独立して妻と二人暮らし、借金が生来嫌いで現

金主義、株・不動産投資はプロ野球の江川、桑田、歌手の千昌夫を反面教師として手を出さない。趣味のテニスは区営コートの月五千円の会員となつて、区のレベルでだがシニアクラスの強豪のひとりだ。そのほか、好きな海釣りを月一、二回。六十歳で定年を迎えたが、社長に体力を買われていまも現役だ。一億円のうちからまとめ払いした個人年金が年百二十万円くるが、厚生年金と国民年金はまだもらっていない――。

二〇〇〇年七月のインタビューでは、年齢からくる衰えでテニスの大会では二回戦負けだ、と嘆いているものの、腹筋とダンベル上げは毎日百回以上、おかげで持病の腰痛を完治させたとも語つて、その六十二歳の「筋骨隆々」を記者に誇つた。しかしそれから五ヵ月後の二〇〇〇年十二月二日、大貫久男は心筋梗塞で亡くなった。本人にとってそれは、

一億円拾得とおなじくらい意外だっただろう。

二〇一六年十二月二十六日、二〇一一年から一二年にかけて化学会社の株価を不正につり上げたとして一五年十二月に東京地検特捜部に起訴されていた加藤嵩あきらが亡くなった。七十五歳だった。

一九七〇年代から八〇年代にかけて仕手集団「誠備せいびグループ」を率いて投機的な株取引を繰り返し、「兜町の風雲児」と呼ばれた加藤が一億円の「落とし主」ではないかといわれ、その金は政治家から集めた資金の一部だったので名のり出られなかった、とも噂された。拘留中に体調を悪化させた加藤は、一六年九月に保釈され、そのまま入院していた。加藤の死で公訴棄却となり、裁判は終結した。

二〇〇〇年代に入ると現金拾得額は増加して年間百億円を超え、二〇一六年には一七七億円におよんだ。一七七億円のうち落とし主や遺族に戻されたのは約七割、五三億円は不明のままだという。

二〇一七年には群馬県沼田市の取り壊された住宅のがれきの中から四二五一万円の札束が見つかった。米びつの中のビニール袋やマッサージチェアの背もたれの内側に現金が敷き詰められていたケースもあった。それは独居高齢者の孤立死が増えた結果で、気づかれずに廃棄された現金も相当な額に上るはずである。